

中世の城

室町時代後半期は戦国時代とも呼ばれ、自分の勢力拡大を目指す人たちによる戦乱が各地で起こりました。戦国時代の後期には、全国を支配しようとするための戦い、いわゆる天下統一を目指した戦いも繰り広げられました。このような戦乱の時期に、戦いや防衛の拠点として、多くの城が築されました。これらの城のなかには、見晴らしが利いて攻められにくい山の上に築かれたもの（山城）があります。また、単に堀（空堀、水堀）や土塁で囲うだけでなく、守りやすく攻めにくいような工夫が様々にされたものもあります。敵が進入しにくくするために通路を折り曲げたり、進入してきた敵を足止めして周囲から攻撃するための空閑地を設けた入り口（枡形ますがた虎口こぐち）を設けたりしています。

綾部市平山城館跡では、斜面に縦方向の堀を14条連続して掘った畝形豎堀群が見つかりました。これは敵が斜面を横方向に展開して攻撃してくるのを防ぐためのもので、比較的ゆるい斜面に設けられます。

舞鶴市大俣城跡おおまたじょうでは、通路を二回折り曲げた虎口が良好に残っ



平山城館跡の畝形の豎堀群

ていました。柱穴も見つかっており、門が造られていたのかもしれませんが。

この時期の山城は、戦いの時に使われるもので、日常生活は麓の館で行われたと考えられています。平山城館や大俣城は、丘陵先端部や小高い山の上に築かれ

ており、山城と呼んでいいのかという問題がありますが、食器として使われたと考えられる国産陶器や高級品の中国製磁器などが多数出土しており、日常生活が営まれていたと見られます。また、平山城館跡では、生活空間から一段高い狭い



田辺城跡の石垣（京田辺市）

平坦地に倉と考えられる礎石敷きの礎石建物が見つかっています。後の天守の祖形のような建物かもしれません。

舞鶴市中山城跡^{なかやまじょう}では、陶磁器類の出土が少なく、非常時に使われた城と見られます。

京田辺市田辺城跡^{たなべじょう}では、丘の東斜面から石垣を築いた虎口が見つかりました。虎口は、方形の平坦地で、正面（西側）に石垣を築いています。その石垣に沿って、南側に上部へ通じる石段が造られています。石垣と石段の間には、平瓦で護岸された溝が設けられています。北側と南側にも石を抜き取った跡などがあり、その部分にも石垣があったと考えられます。東側には門の礎石と考えられる石が置かれています。このような状況は、近世の城の枡形虎口によく似ています。石垣の石材は、面をそろえて平積みされています。石垣の傾斜角度は86°前後で、ほぼ垂直です。石材は、黒っぽい自然石と白い花崗岩^{かこうがん}の割石を使用しています。白黒を対比させて装飾的な効果を意図しているのかもしれません。この石垣には、自然礫^{うらご}を使った裏込めが施されています。15世紀頃の瓦が出土しており、その時期に築かれた石垣と考えられ、数少ない中世の石垣と言えます。土造りが多い京都府の中世の城の中で、石垣を使用した珍しい城です。

（引原茂治）